

順位	氏名（議席）	発言の要旨	答弁者
3	望月 徹（11）	<p>1. 富士市斎場の将来について</p> <p>本市において、亡くなられた方を火葬する斎場は、丘地区にある富士市斎場で、一部では静岡市清水区蒲原の庵原斎場などが使用されています。</p> <p>本市の斎場の施設は、炉が7基（うち1基は小型で汚物用として使用）、炉が入っていない空室が1基あります。受入れから収骨まで約2時間を要するため、1日の受入れは最大14件ですが、友引明けは13件、通常は12件、予約状況により1月から2月は13件を実施する日もあり、年間では約300日稼働しています。</p> <p>今後、団塊の世代の高齢化に伴い、これからの20年間は死亡者数が増加していくことが予想されることから、富士市斎場の将来について、以下、質問いたします。</p> <p>(1) 今後需要が増加する20年先までの需要と供給のバランスについて、シミュレーションをしているか、している場合、その結果について、お伺いいたします。</p> <p>(2) 災害時、近隣都市との連携が不可欠ですが、東部地区あるいは静岡市を含めた地域での需要と供給について、事前に連携していく必要があると考えるが、現状と今後の対応についてどのようにしているかお伺いします。</p> <p>(3) 施設の維持管理について、どのような対策を取っているかお伺いします。</p> <p>2. クリーンセンターききょうの将来について</p> <p>本市の下水処理は主に下水道に直結した処理場として、東部・西部浄化センターがあり、合併処理槽などから引き抜いた汚泥処理をクリーンセンターききょうが担っております。処理人口比率は、概算で浄化センターが70%、ききょうでの処理が30%となっており、ききょう分は減少傾向にあります。</p> <p>ききょうは、し尿、浄化槽汚泥、合併浄化槽汚泥の受入れ・処理工程の中で、汚泥として残ったものは場外（新環境クリーンセンター）に搬出し、液体は最終的に活性炭処理を経て放流しています。平成9年より稼働し、27年経過しており、長寿命化と将来の在り方について、人口減少、処理形態人口の変化、そして浄化センターとの関連も含め、検討を進めていく時期に差しかかっていると考え、以下質問します。</p> <p>現在の処理工程の抜本的な見直しと処理工程の途中から西部浄化センターに合流させるという2案について、ともに需要の変化への対応と経費の大幅な節減に寄与していくと考える。そのため、費用対効果として、ライフサイクルコスト、イニシャルコストとランニングコストなどについて、検討していく段階にあると考えるが、当局の見解を伺います。</p>	市長 及び 担当部長